

紫式部の初宮仕年時をめぐって 増淵勝一

序

昭和十五年（一九四〇）二月に岡一男先生が、紫式部の中宮彰子への初宮仕年時を、寛弘二年（一〇〇五）十二月二十九日のことと論証されて以来〔紫式部官位年代私考〕「安、すでに三十年以上の星霜を経ている。この間、寛弘元年説・同三年説・同四年説などの提唱も少なくなかったが、いずれもその不備や欠陥が指摘されて、岡先生の寛弘二年説は、今井源衛氏〔紫式部〕（昭和四十二年三月刊）角田文衛博士〔紫式部とその時〕（昭和四十二年五月・中野幸一氏日記）（昭和四十六年六月刊）以下〔紫式部〕の賛同もあって、いよいよ確固たる定説となっている。

岡先生の寛弘二年説は、『紫式部日記』『紫式部集』『伊勢大輔集』その他の諸資料を、有機的に分析・再構成された結果によるものであるが〔源氏物語の基礎的研究〕（昭和二九年一月刊）一七―二七頁参照、それだけにその論証過程は複雑で、これがため、本説の趣意が十分には理會され得ない場合もあるらしく、依然として異を唱える向きがなくなはない。しかし、そういうときには、新説の提出も結構だが、いま一度、自己の論証が寛弘二年説に齟齬しないばかりか、かえってそれを傍証するものが

多いかも知れぬということを確認して、自説を再吟味するとよいだろう。

最近、加納重文氏は「紫式部の初宮仕年時」〔古代文化〕第二十四巻第七号（昭和四十七年七月刊）と題するご論稿で、きわめて斬新な観点から、紫式部の寛弘三年初出仕説を提案されたが、この加納氏説なども、叙上の再吟味をぜひともしていただきたい例の一つである。そのわけは、加納氏の御説も、必ずしも寛弘二年出仕説に對立するものではなくて、かえって有力な援証になるものだからであって、以下、どうしてそういう結論になるのか、加納氏説を検討しつつ、私の考えを明らかにしていってみよう。

1

寛弘三年説の新しい提唱の直接的ベースになったのは、『紫式部集』〔定家〕本系〔定家〕取載の次の四首の歌である。

はじめて内裏うちわたりを見るにも、物のあはれなれば、
幼身の憂さは心のうちに慕ひ来て今九重ぞ思ひみだるる

又、いとうあゝあしきまにて、ふるさとに帰りのち、ほのかに語らひける人に、

⑥閉ぢたりし岩間の氷うち解けばを絶えの水も影見えじやは

返し

⑦み山べの花吹きまがふ谷風に結びし水もとけざらめやは

正月十日の程に、「春の歌奉れ」とありければ、まだいで

たちもせぬ隠れ家にて

⑧み吉野は春のけしきに霞めども結ほはれたる雪の下草

加納氏は、最初にこの⑦⑧の四首が十二月二十九日から正月十日

前後までの、時期的に近接する詠であることを認められた上で、

⑨の歌が寛弘四年正月十日立春の作であり、したがって、⑦の歌は

同三年十二月二十九日の詠となつて、これによつて紫式部が中宮彰

子に初出仕したのも、この寛弘三年（一〇〇六）十二月二十九日で

あると説かれたのである。前掲。論文。加納氏が⑨の歌を寛弘四年正月十日

立春の作とされたのは、

① 本歌に用いられている、和歌用語としての「霞」や「雪」の

用法は、新春・早春というより、むしろ立春の叙景を背景にし

た歌詠と考えられる。

② そこで、「正月十日の程に、『春の歌奉れ』」という詞書

は、「正月十日の程の立春の日に、春になった心の歌をたてま

つれ」という意味であつて、寛弘元年から同五年までの立春の

月日を調べてみると、同四年正月十日がこれにあつている。

③ なお、本歌⑧に先行する⑦の歌は、「春が来て氷が解けたな

らば」という歌意によつて、すでに春になりきつてから詠まれ

るようなものではない。

という三条の根拠にもとづいている。この新論拠からの明快な推察は、いかにも説得力に富み、これによれば、定説となつている紫式

部の寛弘二年十二月二十九日立春出仕説は、⑦⑧の四首が立春以前の作ということで、到底成り立たなくなる。しかしながら、はたして本説に、加納氏自身が危惧されるような、「推理の過程に誤りがなかつた」だろうか。

まず疑問になるのは、①の⑧の歌に用いられている「霞や雪」の用法が、立春の叙景を背景にしたものであるとされる前提である。「古今和歌六帖」第一帖「歳時部」へ春Vによれば、その冒頭の「春立つ日」五首の中には、たしかに加納氏があげられた壬生忠岑の、

春立つといふばかりにやみ吉野の山も霞みて今朝は見ゆらむの詠なども見え、立春の叙景にもとづく「霞」の用法も少なからず存在する。しかし、「み吉野の山も霞みて」が、いつも立春の叙景を背景にした歌詠かといえは、同じく『六帖』へ春Vの「朔日のひ」五首の中に、

きのふこそ年は暮れしか春霞春日の山にはや立ちにけり（山辺赤人）

とか、

吉野山峯の白雪いつ消えて今朝は霞の立ち変わるらむ（源重之）という詠もあつて、曆の上での立春日のほかに、元旦を迎えて春の訪れを実感するという風習のあつたことも理合される。

さらに、この「朔日のひ」の歌につづく「残りの雪」十八首の中にも、

霞立ち木の芽も春の雪降れば花なき里も花ぞ散りける（貫之）とか、

春霞立ち寄らねばやみ吉野の山に今さへ雪の降るらむ（貫之）

などの歌があげられていて、(60)の歌に見られる「霞」や「雪」の用法を、決して立春の叙景にもとづくものとはばかり限定することはできないのである。特に、最後にあげた「春霞」の歌は、ちょうど(60)の歌のみ吉野と式部の隠れ家との景観の対比を逆にした趣があつて、式部の詠が新春・早春の作であることを確信させるものである。

ちなみに、「六帖」にいう「残りの雪」とは、新春を迎えてもお降りつもる(冬の名残りの)雪という意味のものである。(60)の歌に詠み込まれたような「霞」や「雪」の用法は、「六帖」でも「仲の春」や「春のはて」などの歌には見られない。

勅撰集の「春部」巻頭歌は立春ないし元旦の詠であり、これにつづく数首もこの類が多いから、そこだけに注目していると、立春を背景にした「霞」や「雪」の歌詠ばかりが目立つのである。この式部の詠(60)は、「後拾遺和歌集」第一「春上」の十首目に、「一条院の御時、殿上人「春の歌」とて乞ひ侍りければ、詠める」という詞書で入集しているが、この「後拾遺集」の配列を検討してみると、

- 1 陸月一日、詠み侍りける。
- 2 陸奥国に侍りける時、春立つ日、詠み侍りける。
- 3 「春は東より来る」といふ心を詠み侍りける。
- 4 春立つ日、詠み侍りける。
- 5 寛和二年、花山院の歌合に、詠み侍りける。
- 6 年籠りに山寺に侍りけるに、「今日はいかが」と人の問ひて侍りければ、詠める。
- 7 山寺にて、陸月に雪の降れるを詠める。
- 8 題知らず。

9 天曆三年、太政大臣の七十賀し侍りける屏風に詠める。

(省略)

10 花山院の歌合に、「霞」を詠み侍りける。

11 題知らず。……

12 となつてゐる。これによれば、『後拾遺集』の撰者は、元旦(1)

・立春(2~6)・新春(7以下)の順に配歌していることは明らかであつて、式部の詠(60)が新春の作と理會されていたこともまた判明するのである。

すなわち、(60)の歌に見られる「霞」や「雪」の用法は、立春日・元旦・早春の歌にかわりなく存在するものであつて、したがつて、本歌を立春の叙景を背景にした作と限定することはできない。むしろ、立春日の詠が、「春霞立てる」「春立つ」「霞の立ちかはる」「春も越えつらむ」等の、春立つことを明示する表現を持つことが多いのに対して、「春のけしきに霞めども」となだらかに春の情景を表出した式部の詠は、「六帖」の貫之の「春霞」の歌の趣と通い合うことも相俟つて、早春の作と考えた方がよいだろう。『後拾遺集』撰者は、詞書に不審を残しつつも、その意味で正鶴を射た配列を、式部の詠(60)に施したのである。

(ついでに言えば、本歌がたとえ立春の叙景を背景にした詠であっても、実は立春日に詠まれなくてはならない、という必然性はないのである。「み吉野の」発句が実景でないことは明らかであるが、屏風歌あるいは小さな歌会などの出詠歌である場合も当然考えられる。そのような、すでに立春日をあとにしても八あるいは立春日の直前であつたとしても、与えられた歌題によつて、これにふさわしい景情を詠み出す列は、公私の歌集にしばしば見受け

られるところである。)

2

⑥の歌が立春日の詠歌ではなくて、早春の叙景を詠んだものであることよって、加納氏があげられた②の、「正月十日の程」を「正月十日の程の立春の日に」とする解釈も、もちろん成り立たなくなる。もともと、「正月十日の程」を、イコール「正月十日」と短絡することさえ危ぶまれるのであるが、そのこと自体では、寛弘三年および同五年の立春は旧年中にあるから、寛弘二年十二月廿九日および同四年十二月廿一日が立春（岡一男先生「譚談社写真文庫・源氏物」）、「十日のほど」の立春日、即寛弘四年正月十日だと主張するかも知れない。しかし、「紫式部集」の時日記載の例を見ると、

(1) 七月十日の程原本「頃」

(2) 霜月ばかり

(3) 陸月十日ばかり

(4) 花の散る頃

(5) 去年の夏より

等と漠然と記すものがある一方、

(2) 秋の果つる日

(6) 五月五日にあたりし

(7) 宮の御産養、五日の夜

(8) 御五十日の夜

(10) 陸月の三日

等と、明確に日時を記すものもあって、式部の記憶に焼き付けられた印象の強弱をおのずと実感することができる。彼女は、自分の

「日記」に初出仕の日を「師走の二十九日」と書き残しているくらいである。初宮仕退出後の最初の御召し歌が、立春日の詠という晴れやかなものであったとすれば、はっきりと「正月十日」とか、「春立ちける日に」とか記しただろう。それを「正月十日の程に」と漠然と記しているのは、この⑥の歌が、そういう晴れやかな背景のものではなくて、中宮彰子の式部への、私的な思し召しに対する返答であったからであろう。

すなわち、⑥の詞書からは、「正月十日の程の立春の日に」というような意味合いはとも引き出せぬ。早春の正月十日頃に、中宮様から「春の歌を奉るように」と仰せ言があったので、という至って平凡な解釈に落ち着かざるを得ないのである。

3

もつとも、岡一男先生のご示教によると、こうした煩瑣な説明を施さなくとも、実は、⑥の歌の「み山べの花吹きまがふ、谷風に」の句こそが、早春の叙景を背景にした詠作であることは、「花吹きまがふ」の一句より推して、あまりにも明白であって、そうとすれば、つづく⑦の歌が早春の詠であることもまた確かであるとのことである。「花吹きまがふ」の「吹きまがふ」とは、『源氏物語』「初音」巻に、「梅の香も御簾の内の匂ひに吹きまがひて」とあり、また「夕霧」巻に、「時雨いと心あわたたしう吹きまがひ、云々」と見えるように、区別のつかぬように吹きまぎれる、風に吹かれて乱れる、という意味である。しかも谷風に吹き乱れるのは里の花ではない。深山辺の花である。いかにも早春の山峡の風情が感じられるではないか。本歌と同じく「谷風」および「花」「結びし水」等の用

語を使った春の歌としては、

谷風に解くる氷のひまごとにうち出づる波や春のはつ花（『古今集』「春」・源当純）

春風の吹きそめしより滝つ瀬の氷も解けて花ぞ散りける（『古今六帖』「天」・春の風）

氷解く風につけつつ梅の花行く水にさへ匂ふなりけり（『源順集』）

等があり、また「尋残花」という題の、

谷風にみ山の花や残りありと打ちぞ渡れる水も騒ぐに（『藤原長能集』）

の一首も、^⑧の歌を早春の歌と勘案するのに参考となる。すなわち、ここではすでに、「花吹きまがふ谷風」の吹いていることが叙せられているわけで、これによって、（春の訪れをも知らぬげの）結んだ水も、解けるであろうと、返しているのである。

4

それなら、^③にいう^⑧の答歌に対する^⑧の贈歌が「すでに春になりきつてから詠まれるようなものでない」事実を、どう解釈するか。それは、加納氏が竹内美千代氏の「紫式部集評釈」の「春が来て解けたならば」という訳文に引かれて設定したこの前提を、取り消せばよいのである。なぜなら、「うち解けば」という仮定条件は、春の訪れに因してのものではなくて、あくまでも岩間の氷の解離についてのものだからである。つまり、ここから春を期待するよな意味合いは直接的には出てこないのである。そこで、早春の叙景を背景にした^⑧の歌との関連で考えると、このうち「解けば」は、

「春が来て解けたならば」ではなくて、「春が来たので、あるから解けたならば」としなくてはならないことに気づくであろう。^⑧の「岩間の氷」は^⑧の「結びし水」に同じであるが、そうすると、^⑧の上三句は「ほのかに語らひける人」の状態を言っていることになり、また下二句は紫式部自身の心情を述べていることになる。その意味で、竹内氏が本歌の真意を、「あなたが打解けて下さるなら、私も姿を見せましょう」と訳されたのは正しいが、表の意味としては、（すでに春になったのであるから）岩間を閉じていた水も解けるならば、とだえていた水の姿が見えないことはないだろう、となるのである。

^⑧詞書の「また、いとうるうあしきさまにて」は、もちろん^⑧の歌を承けて、式部の初宮仕え直後のういういしい有様を叙しているが、その発想は、初春を迎えてのなにか心うきうきする趣にピッタリだ。そのポツとした勢いで、以前、「ほの語らひける人」のうちとけぬ語りかけに拒絶反応を起していたのに、「閉ぢたりし」の歌を贈って、復交を誘いかけたのである。これに対する「ほの語らひける人」の返しは、あなたが折れてくださるなら、私もうちとけましようという大意だが、岡一男先生が、「『み山べの花吹きまがふ』は、この贈答の季節が春立つて、岩間の氷が溶けはじめたばかりの時であることを思ふと、彼女の宮仕へに対する一種の皮肉としか取れない」と言われたのは、まさに至言である。『源氏物語の基礎的研究』一〇〇頁

5

ここにおいて、^⑧^⑨の三首は、いずれも早春の叙景を背景にした歌詠であることが再確認されるときにも、加納氏が^⑧の歌を寛弘

四年正月十日立春の作とされた論拠①②③にも、到底従い難いことになる。したがって、本歌をもとに、④の歌を寛弘三年十二月二十九日の作とすることはできないし、またこれによる紫式部の寛弘三年初宮仕説が成り立つはずもないのである。

しかし、こうして論述して来ても、それは感性批評にすぎないから、④の歌はやはり正月十日立春の詠作であると主張するかも知れない。そしてこの解釈が万が一成り立つとすれば、その場合は、④の歌だけが寛弘四年正月十日の作か、あるいは④の歌のみが寛弘二年十二月二十九日の詠とするしかないのである。なぜなら、紫式部の寛弘二年初出仕は、岡先生がつとに「紫式部宮仕年代私考」拙稿において、『紫式部日記』寛弘五年十一月二十八日条に、

兼時が去年まではいとつきづきしげなりしを、こよなく衰へたる振舞ぞ、見知るまじき人の上なれど、あはれに思ひよそへらるること多く侍る。

とあるによつて、紫式部が去年の十一月二十二日の賀茂臨時祭以前・そのれを目撃していたはずであり、「式部は、自分も去年まではまだ若々しく、女官らしくもあつたが、もう駄目だと、兼時に比べて悲観してゐるのを見ると、少なくともすでに去年(寛弘四年)・一昨年(寛弘三年)の二年位は宮仕へしてゐたと思はれるから、多分寛弘二年の暮に出仕したのではないかと」考証されており、動かし難い事実になっているからである。加納氏は、これにつき、「紫式部が寛弘四年十一月二十二日の賀茂臨時祭を体験していることを証された云々」と、岡先生の御説を簡約化してしまわれたが、先生は「去年までは」の句を吟味されて、少なくとも寛弘四年および三年の臨時祭における式部の実体験を説かれていますのであつて、その詳細に

ついては前稿「紫式部初宮仕の年時について」『平安朝文学研究』第二巻第九号(昭和四十四年四月刊)で論述したとおりである。

なお、岡先生が『源氏物語事典』(春秋社版) 昭和三十一年十二月刊 第一章

「作者と成立」に、新たに、

『紫式部日記』寛弘五年十一月二十一日の条に、「寅の日の朝、殿上人まゐる。常のごとなれど、若人(紫式部の侍女)たちのめづらしと思へるけしきなり」とあるのは、少なくとも寛弘三、四年の五節を見ていなければ言えない言葉で、これだけでも寛弘二年十二月二十九日宮仕説は成立すると思う。

と説かれていることによつても、紫式部の寛弘二年初出仕説がさらに確固となつている事実を付け加わえておこう。したがって、④の歌がたとえ寛弘四年正月十日立春の詠であつても、式部の寛弘二年初宮仕説に支障がないことは前述したとおりだが、これまで検討してきたように、⑤⑥の三首は、いずれも寛弘三年春になつてからの歌なのである。

6

一体、「み吉野は」の歌④は、「まだ出で立ちもせぬ隠れ家」からの返信であるから、春がすでに出来しているのに、なかなか出仕しない式部を、中宮が「春の歌」を召すという口実で、参内させようといふ誘ひをかけたのである。本歌につづいては、

弥生ばかりに、宮の弁のおもと、「いつか参り給ふ」など書きて、

④憂きことを思ひみだれて青柳のいと久しくもなりにけるかな
かへし

②つれづれと長雨降る日は青柳のいとど憂き世にみだれてぞふる
という贈答歌が見える。宮の弁のおもとの「いつか参り給ふ」の書
信および①の歌に詠み込まれた「いと久しくもなりけるかな」の
句によって、式部が三月になっても依然として参内していないこと
が判明する。②の「いとど憂き世にみだれてぞふる」は、①の「い
ま九重ぞ思ひみだるる」に通じ合う心情であろう。そんな彼女は、
「かばかり思ひ屈しぬべき身を、いといたうも上衆めくかな」と批
難されたりもする(③)。

ところで、寛弘四年に入ると、同じ里邸に在るにしても、

紅梅を折りて、里より参らすとて、

(103)埋れ木の下にやつるる梅の花香をだに散らせる雲の上まで

という献歌には、①②等極度の鬱屈した内面より由来する逃避
的態度が見られない。岡先生は、「この歌は中宮の御心を動かし、
弟の惟規は少内記から兵部丞に陞り、藏人に補せられた」と説かれ
たが「源氏物語の基礎、やや前途に明るい見通しのできた情況が、こ
の寛弘四年春の式部の身辺なのである。そして、四月には伊勢大輔
に譲りはしたものの、興福寺の桜取り入れの役に任ぜられるくらい
になっており、また、「いとうち解けては見えじとむ思」われて
いた、中宮彰子の歌の代作までし奉るに至っているのである。

こうして見てくると、①②の歌群に詠み込まれた心情は、とて
も寛弘四年春のそれとは考えられまい。その不調和性は、式部の初
宮仕えを寛弘二年暮としてこそ、明くる初春の心境に①②の歌境
が一致することで、解消するのである。したがって、加納氏の論拠
も紫式部の寛弘二年出仕説を否定するものではなく、むしろこれを
積極的に傍証するものと考えていただけらると思う。(72・11・29)

研究余瀆 I「今物語」人物小考

◇説話文学には、三人称や官名などで記された人物がたびたび
登場する。鎌倉期に成った『今物語』の十九段の主人公「左馬
権頭」もその一人である。御白河院御幸の御供で日吉神社に参
った時、上達部が詠んだ上の句に見事な下の句を付けたという
この左馬権頭は、加茂臨時祭の舞人の経験もあつたらしい。こ
のことを考え合わせると、本話の主人公として興味深い人物が
あがつてくる。即ち、後白河院の日吉御幸(仁安二年・十月二
十五日)があつた同じ仁安二年(一一六七)の十一月二十一日
に賀茂臨時祭の舞人となつた藤原隆信(一一四二—一一〇五)
である(『百鍊抄』『玉葉』『兵範記』)。もっとも隆信が左馬
権頭としてその名が見えるのは、承安三年(一一七二)十月十
七日の「広田社歌合」に出詠している際が最初で、舞人をつと
めた仁安二年は右馬権頭に位していた(永万二年一一六六
八月二十六日開催の「中宮亮重家朝臣歌合」の作者の中に
「右馬権頭隆信」とある)のだが、他に左馬権頭の名は所見が
ない。また、家集『隆信朝臣集』下八恋六Vに「後白河院の御
ともし日吉にまゐりこもりてみやこなる女のもとへいひをくり
し」と詞書した歌が見えるので、「左馬権頭」と「右馬権頭」
の差異はあるが、指名を受けるほど歌人としても認められてい
た本話の主人公「左馬権頭」に該当する人物として、藤原隆信
を掲げてよいと思う。作者信実も父のことなので自明のこと
として官名だけをあげたのではないだろうか。(角津典子)